

自己統制の役割とその規定要因

○中 田 栄

(日本学術振興会)

目的 本研究では、自己統制の役割とその規定要因として、子どもの対人相互作用過程における行動特性を捉え、自己を調整していく過程について検討していく。さらに日本の文化的背景を踏まえ、子どもの対人認知過程における自己統制の役割を検討する。

方法 (1)対象：幼稚園に在籍する5歳児から6歳児までの幼児12名(日本人8名、アメリカ人4名)とその母親を対象とした。(2)内容：親の子どもへの介入と子ども同士の相互作用をビデオに記録した。

チェックリスト：①相互作用の経過，②相手の意図の判断，③相手に対する期待，④相手の反応，⑤その後の対人関係，⑥自己評価，⑦期待した内容と結果との相違

結果 ①日本の親子の事例では、親子関係が密接であるがゆえに、親が不安定な状態であると、子どもは、不安を自分の状態として受けとめやすく、子どもなりの目的をもつことができなくなる、②親の子どもへの対応のあり方や対人交渉は異なるが、子どもの情動反応については、共通点がみられた。日本とアメリカの親の子どもへの介入の様子と子ども同士の相互作用について検討した結果、アメリカの場合には、子どものほうから要求しなければ介入しないことが示唆された。課題遂行場面では、それぞれが異なった視点から探索を繰り返す、他者と自分のアイデアを組み合わせることにより、多様な表現につながった。このことから、子どもがいろいろな考えを試しながら自ら意志決定し、自己効力を高めていくための多くの機会が必要である。